

論文の内容の要旨

論文題目 武野紹鷗 茶と文藝

氏名 戸田 勝久

「茶湯正脈」と題された、一枚の文書が軸装されて、多く伝承している。

(一例、「茶人 川上太白」川上宗雪著、平成19年11月4日刊)的々相伝された、茶湯者の安名のみが列記されている。それらは、必ず珠光、紹鷗に始まり、ついで行を替えて、利休となり、以下人脈として継承される。

起筆は、珠光であり、紹鷗、そして利休から、千家歴代に繁る。しかし、珠光と紹鷗には、直接の面晤はない。珠光の歿年とされる、文亀2年(1502)に、紹鷗は生まれている。珠光の生年は不明だが、忌日も厳密な資料検索は果たされていない。

金春禅鳳の「禅鳳申楽談儀」(「日本思想大系23」岩波書店)にある「珠光の物語とて、月も雲間のなきは嫌にて候、これ面白く候」とあるのが、唯一、芸道に關聯する場面での「珠光」の存在を示している。客観性を有する手懸かりであり、その余は、茶の場という限定世界の伝聞にすぎない。さらに珠光の血脈も後継者とされる、村田宗珠を以って、茶の湯世界では衰退する。

茶の湯に於て、最初に歴史資料的にその存在を明確にするのが、武野紹鷗であり、その影響下に、千利休、津田宗及、今井宗久など、何れも環濠貿易都市、

堺を背景として、政治性の濃厚な商人でもある、茶湯者を輩出して、茶の湯文化を結実させた。

紹鷗の存在を証明する、歴史資料の第一に「實隆公記」（「續群書類従完成会」刊）をあげることが出来る。

「實隆公記」に記載されている紹鷗(新五郎)の項目を全て摘出した。紹鷗研究は、この記録の中から始る。この日記の筆者、三條西實隆との出会が、武野紹鷗を成立させる。即ちこれが、茶の湯文化の淵源となる。

紹鷗は實隆から、和歌、連歌の実作を学んだ。軸装短冊、写本「紹鷗家集」（祐徳文庫蔵）、實隆の歌日記「再昌草」（桂宮本叢書）などが伝わる。また同時に伊勢物語、三代集などの講筵に列したが、とりわけ、享祿3年（1530）3月21日の項にある「詠哥大概一卷遣武野」の文字が重い。

その實隆邸で同座した、周桂、宗牧、宗碩などの連歌師の警咳に接することを得た。そして、實隆への夥しい金品の寄贈である。堺における武野家の財力の卓越を物語る。これが後年の、中国美術品蒐集の資力を担保している。精神主義的な傾向の強い「侘茶」の背後にある。豊饒を保証している。

實隆から与えられた、定家の「詠哥大概」が、茶の湯と我国独自の文芸との、結節点となり、茶の湯を単なる、喫茶の領域から跳躍させ、独自の文化を形成させることになる。当然その基盤には、日常的な飲茶が不可欠だから、生活を指導するし、独自の美意識を誕生させた。茶の湯が、割烹の技術、食事の作法をその傘下に治めたことが重要である。

生活は家庭を場とするから、各家の個性と密着する。家の在方、姿勢と共存している。茶の湯は、それぞれの家の文化としての側面を有している。そこに、個性的な人間の誕生が参入してくる。紹鷗にとって、嗣子の宗瓦、孫の宗朝の出現が重い。彼らの總体が茶の湯を形成する。一代では完結しないのが、特性である。武野家の系譜資料として巻物系図の他に、宗朝自筆の「牌上二書ス」とする、自己の主張を掲げた。

利休は、孫に宗旦を得て、その茶の湯を結実させる。裏千家で云えば、16代の現在に至る血脈の世代を逆に辿り、なぞることで、利休の茶の全身像を知ることが出来る。利休が、日本文化を象徴する由縁もそこにある。千家は芸能の家ではなく、歴代も西歐的概念の芸術家として位置づけられていない。（茶の

湯から芸術院会員は出ていない)

武野家の歴史を解明することで、家の文化としての茶の湯の独自性を問いたいと心掛けて来た。千家との対比に於て捕捉すれば、茶の湯を立体化し、その独自性を認識することが出来る、と思った。

日本家屋における、床の間という室内の場の設定は、巻物ではなく、軸装された掛物を鑑賞する、茶の湯空間、展示スペースとして考え出された。この要点は、恒常的に飾物を数多く置くのではなく、その時の状況に対応した只一点を取替えることで、来客への持成とする。

中国禅僧の書跡、唐絵に占居させるのではなく、紹鷗が定家の小倉色紙を用いた所に、和の文芸を日常の中で享受する、革命的な、生活空間の充実が果たされた。そこはまた、立華ではなく投入の花を楽しむことで、人格の陶冶を促進した。紹鷗の消息文が表具されていることは、人格への敬慕と共に、日常品の贈答、来往など生活に密着した、茶の湯の特性を際立たせている。

茶の湯の点前が、夏季(5月～10月)は、風炉を用い、冬季(11月～4月)は炉を開ける、という仕分は、現代の仕様であるが、点前の成立の経緯としてみれば、台子を用いる式正の風炉が先行し、囲炉裡から発想された。日常の生活に炉の形が馴染んでいった。

この炉の形状に八炉(半分は逆勝手であるから、実際は4通りとなる)があって、これらは何れも、四畳半を含まない、小座敷(原則として)に切られる。(台目切、向切、隅炉、出炉)これら小座敷での点前は、炉の場合、4通りであるが、此処に風炉を置けば、全て同一の点前になる。

このことは、茶の湯の点前が、小座敷の炉に、重要度が加味され、千家流では、唐物の入らない、侘茶の舞台となる。より修練された、点前をして客に対応することを主眼とする。そこは、高価な茶道具の展覧場に非ず、という思想である。

「紹鷗の袋棚」に紙幅を割いてきたのは、この大棚には、風炉は入らず、炉に専用される。台子、及台子、大棚、水指棚の進化展覧の中で、大棚(紹鷗棚)の占める意義は、紹鷗によって、茶の湯が台子(唐物偏重)から、小座敷の茶の湯に移項する、分岐点となった所にある。そこに、「紹鷗の袋棚」(四畳半に適する)にこだわる理由がある。

茶の湯で形物とよばれている、小道具、釜、棗、箆、或いは棚（大・小）即ち、紹鷗好、紹鷗形など、これも、紹鷗を以って嚆矢とする。これが日常生活用具を豊潤にするし、工芸作家の育成に寄与した。珠光には、それがない。

紹鷗の茶の湯思想を探る資料として、「佗の文」が知られていた。しかし、この文章の典拠が曖昧のため、寄付けないできた。東北大学図書館狩野文庫の速水宗達自筆稿本「卑言類聚」の中に「紹鷗利休二をくりしふみ」として、「佗の文」が収録されていることを発見し、同時に川上不白の自筆が軸装されていることも確認した。

高名な二人の茶湯者の保証を得て「佗の文」を紹鷗に繁る文書として議論することが出来た。同様に「紹鷗門弟への法度」も、松平不味が整文し「紹鷗の十箇條」とて板額装されている。これ以上の典拠を求めることは、今の段階では困難であろう。しかし、猶、今後の博攬も心掛けたい。

茶道史の上で、速水宗達ほどの碩学が、自筆で「紹鷗利休二をくりしふみ」と書いている事実は、紹鷗と利休との直接交渉を語る向きに、頂門の一針となるだろう。この世界では、一流の茶易者の歴史の中での、伝承と認識が優位であって、零本の些末な言葉遣いや、考証の届いていない文書を以って、王道を歪めることは出来ない。

紹鷗の名を千家の歴史の中で高揚し、不朽のものにしたのは、宗旦であった。嫡子の江岑が紀州徳川家に仕官を成就した、寛永19年(1642)に、謝礼として、紹鷗の「浅茅」銘の茶杓と、利休の大脇差建水を奉献している。紹鷗、利休の連繫を強調しているし、一方が人格を具える茶杓であるのに対し、名物とは云え家祖の利休は、水屋道具に等しい建水と謙退している。

紹鷗の門下には、利休に拮抗する、津田宗及があった。利休の風体に屈服していない宗及の次子、江月宗玩の存在が重い。江月の龍光院(密庵床の席を持つ)、孤蓬庵(小堀家の菩提所)は、深く連動している。即ち小堀遠州には、利休、織部、遠州という茶系とは別に、紹鷗、宗及、江月、遠州の秀抜した回路が、開通していた、と云える。

近世の茶の湯を二分する。宗旦と遠州は、共に紹鷗をそれぞれの理解に於て、吸収し展開した、と云える。或いは、紹鷗の存在は茶の湯理論の構築の上からみれば、利休より重いのである。

阿弥号を持った、半俗学僧の学芸、技芸に携わる人達の風体、世間への対処の仕方が、この国の「芸術家」の素性を決定づけた。それは、能、絵画、庭園、聞香、生花、書芸、喫茶の各分野に及ぶが、とりわけ、学問、文芸を生業とする連歌師こそが、祖型としての役割を演じる。彼らは、室町時代に陸続として輩出して、後代に決定的な影響を与えた、と云える。連歌師達に、照明をあてることで、本論の結びとした。